

資料

10年間の看護文献にみる口腔ケア方法の検討

—1997-2006年—

倉鋪桂子, 福森絢子, 網木政江, 原 哲也, 松下智美

宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科

キーワード: 口腔ケア, 看護師, 口腔の清潔, 口腔の機能回復

I. はじめに

口腔ケアは看護行為における清潔ケアの一つであり, 口腔の汚れを取ることで定義されている¹⁾. 口腔ケアの重要性が注目されるようになったのは, 口腔内細菌が高齢者の誤嚥性肺炎を引き起こしている可能性が明らかとなったことからである²⁾. このために口腔ケアの概念の中に口腔の清潔とともに嚥下機能の低下に対するケアも加えられるようになった. 口腔を清潔にする口腔ケアを狭義の口腔ケアといい, 口腔がもっているあらゆる機能の働きを健全に維持することを広義の口腔ケアという³⁾. 広義の口腔ケアには看護のケアとしては摂食, 嚥下, 構音, 唾液分泌などの機能を健全に維持することや疾病や加齢などにより低下した機能の回復を促すケアがある. 2006年に日本看護協会は認定看護師の教育課程に摂食・嚥下障害看護を加え, 看護師が果たす口腔ケアの役割を拡大した.

また, 山中⁴⁾は口腔ケアの定義を「口腔の疾病予防, 健康の保持増進, リハビリテーションによってQOLの向上を目指した科学であり技術である。」としている. この定義は究極の目的をQOLに置いており, 口腔ケアは

人間の生命維持や社会生活全体に大きく影響するものであることを意味していると考え.

これらのことを考えて本研究は, 臨床の看護師が口腔ケアに何を求めて, どのようにケアを行っているのか, という点について文献を通して検討をすることにした.

研究対象とした文献は, 臨床の看護師が第1著者である「口腔ケア」に関する原著論文である. その中で看護師が口腔ケアをするとき, 口腔の清潔を目的としてケアしたのか, あるいは口腔機能の回復を促進することを目的としてケアしたのか, について分析した. 研究対象に看護師の原著論文を選んだのは, 「看護の方法は看護研究によって開発される性質のものであり,

看護専門職者固有の技術である。」⁵⁾ということから, 看護の研究を通して看護専門職者の固有の技術となる口腔ケアについて示唆を得るためである.

〔研究目的〕

看護師による口腔ケアの研究において, 口腔の清潔と口腔機能の回復のケアがどのように行われているかを明らかにすることである.

〔言葉の操作的定義〕

口腔ケア: 口腔内の汚れをとることおよび口腔機能の回復を促すこと.

II. 研究方法

1. 文献の検索

1) オンラインデータベース医学中央雑誌(以下医中誌という)Web版Ver.4により, 検索語「口腔ケア」, 分類「看護」, 論文種類「原著論文」, 期間「1997年から2006年」から検索された文献のうち, 看護師が第1著者であるものを選び, その中から口腔ケアの方法について詳細に論じられているものを対象とした.

2) 調査期間

2007年10月～2008年2月

データは逐次追加されていることから最終のデータ検索日は2008年1月16日とした.

3) 分析方法

本研究では, 看護師が口腔ケアの研究において, 口腔の清潔と口腔の機能回復に対して, どのような方法を用いたかについて分析した. また, 口腔ケアの文献数を把握するために文献の数について検討した.

III. 結果

1. 口腔ケアに関する文献数

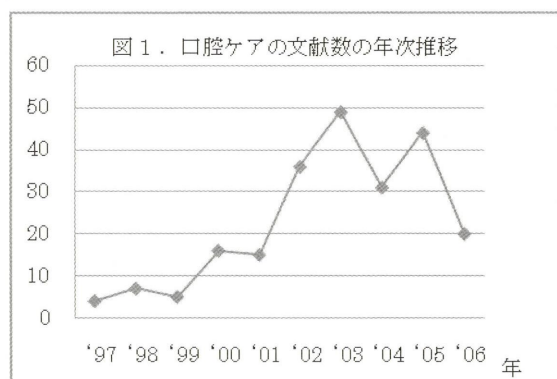
医学中央雑誌に収録されている10年間の「口腔ケア」, 「看護」, 「原著論文」の文献数は252件であった. こ

のうち看護師が第1著者でない文献および「口腔ケア」の用語があっても本研究の目的に該当しないものを除いた結果は227件となった。また227件の内訳は、口腔ケアの方法に関するもの157(69.2%)、看護師に対しての口腔ケアの意識調査22(9.7%)件、看護基礎教育における口腔ケアの教育内容11(4.8%)件、口腔ケアにおける他職種との連携8(3.5%)件、文献研究4(1.8%)件、その他25(11.0%)件であった。

また、今回検討の対象とした口腔ケアの方法に関する157件の研究論文のうち明確な目的や方法が書かれているものを選び、最終的に対象とした論文は97件であった。

文献の年次推移をみると看護師が第1著者である口腔ケアに関する総文献数227件については2003年まで年ごとに増加しているが2003年をピークとして下降し始め、2005年に一時増加した後は再び減少している。

図1



2. 口腔ケアの方法

1) 研究対象者

入院患者で非経口摂取あるいは嚥下困難な者81(83.5%)件、精神障害者8(8.3%)件、重症心身障害者(児)3(3.1%)件、健康な成人を対象としたもの4(4.1%)件、小児1(1.0%)件あった。

2) 口腔の清潔を主とした口腔ケア

口腔の清潔を主としたケアでは、洗口剤を用いたケアとブラッシングによるケアがあった。

(1) 洗口剤による口腔ケア

口腔ケアの方法で最も多かったのが口腔の汚れをとるために洗口剤を用いた研究であり、63件(64.9%)あった。なかでも洗口剤として日常的に用いられている食品を用いてその効果が試されていた。理由は、臨床では通常、口腔ケアにポピドンヨード液を使って行われているが、ポピドンヨードはヨード過敏症のある患者には避けなければならないこと⁶⁾や副作用として乾燥を増すこと⁷⁾、また薬品の持つ独特な臭い・味が患者にとって不快である^{8)~10)}ことにより、患者の生活

に馴染みのある食品の成分により口腔内の細菌を殺菌する、汚れを溶解する、あるいはその味覚から唾液の分泌を促すことによって口腔の清潔保持を図りたいというものであった。研究の対象者のほとんどは経口摂取をしていないため、口腔内は乾燥し、舌苔があり、口臭のある患者であった。口腔ケアの結果の判定は口腔内の症状(乾燥、舌苔、口臭、歯肉腫脹、出血など)および清潔状態の観察、唾液分泌量および酸・塩基平衡指数(以下pHと略す)の測定、口腔内の細菌培養により菌の数・種類を調べるものであった。

洗口剤には、緑茶(含カテキン[®])^{11)~20)}、レモン^{21)~25)}、酢(梅酢、穀物酢)^{26)~27)}、パイナップル^{28)~29)}、キューイ³⁰⁾、アロエ³¹⁾、ハッカ^{32)~33)}、ごま油^{34)~35)}、ハーブ³⁶⁾、はちみつ³⁷⁾が用いられていた。このほかに中性電解水³⁸⁾、酸性水^{39)~40)}、ハイクロソフト酸化水⁴¹⁾や薬品としてはアズノール軟膏⁴²⁾、リスチリン[®]^{43)~44)}が用いられていた。

方法はこれらの洗口剤をガーゼや綿棒で清拭する、あるいはブラシに浸して歯や舌の表面を擦る、またはこれらの液を定期的に口腔内に噴霧していた。これらの洗口剤による口腔ケアの効果をみるために同一対象に対し、時間を置いて20~30倍希釈液ポピドンヨード液による口腔ケアを施行し、口腔内症状、pHの測定、口腔内細菌数について調べ、両者を比較していた。口腔ケアの施行期間は最短が8時間で最長は2年6カ月であった。食品を用いた研究はすべて口腔ケアに有効であったとされていた。しかし口腔内殺菌に対しては、ポピドンヨード液の方が勝っていた。梅酢の場合⁸⁾では、口腔内の菌数は約1/2に減少し、ポピドンヨード20倍希釈液の場合は約1/3に減少していた。

研究者の中には、食品の洗口剤は口腔ケアには効果的であっても臨床では作る手間がかかることが問題であると考察されていた。

(2) ブラッシングによる口腔ケア

ブラッシングの効果をみる口腔ケアの研究は11件(11.3%)^{45)~55)}であった。目的は歯の清潔に加えて口腔粘膜や舌苔の汚れを取ることおよび口腔内の乾燥を軽減しようとするものであった。

ブラッシングの口腔ケアの結果では、口腔内の清潔状態(舌苔や口腔内乾燥)や病的状態は改善したとあった。しかし、口腔細菌に関しては培養の結果、施行前と比較して口腔内細菌数が増加したものとや清潔度測定器による測定では清潔度が低くなっていた。比較として用いたポピドンヨード液による口腔ケアでは細菌数は減少していた。

このことについて、迫田⁵⁵⁾は大学3年生の学生に授業でブラッシングをさせ、その後含漱をさせて、ブラッシングを行う前後の唾液を培養していた。結果は、

ブラッシング後に口腔細菌数の増加した者が 67.9%, 減少した者 24.8%, 変化なしは 7.3%であったという。この原因は演習中の確実なブラッシングによって口腔バイオフィルムが剥離して口腔内に細菌が流出し、唾液内の細菌が結果的に増加したものであるという。ブラッシング後の細菌数の増加に関しての他の研究では、長期人工呼吸療法児にブラッシングを試みた研究において口腔内の緑膿菌は減少傾向であったが、気管からの分泌液の緑膿菌数はブラッシング以後、日を追って増加していた。

歯を毎日十分に磨いていない者は歯に歯垢がたまり、バイオフィルムが形成されやすくなる。歯垢は口腔内細菌の塊であり、このバイオフィルムは物理的な方法によって除去されなければならない⁵⁶⁾という。ガーゼなどを使って口の中をぬぐうだけの口腔清拭では、表面だけの汚れを取るにすぎない⁵⁷⁾といわれていることから拭くだけの口腔ケアでは短い時間の効果しか得られていないと考える。

道重⁴⁶⁾は重度心身障害者病棟に入院中の重心者に対してブラッシング法を改善しながら 2 年 6 カ月の期間に渡る研究をしていた。市販の歯ブラシによるブラッシングから給吸ブラシに変更することによって口腔清掃状態、歯肉炎、歯肉出血、口臭は変更 2 か月後には著しく改善されたという。磨き残しをしない確実なブラッシングを行うために口腔ケアの時間を勤務者の多くいる時間帯に合わせて組むことによって、口腔ケアの回数を 1 日 2 回から 1 回にしても清潔効果が得られるとしている。

3) 口腔の機能を回復させるための口腔ケア

(1) 唾液分泌を促す口腔ケア

唾液が口腔を潤すことにより口腔の清潔を保持しようとするところから唾液分泌の効果を狙った研究が 13 件 (13.4%)^{58) - 70)}あった。特に口腔が乾燥している者を対象にしていた。

精神科病棟に入院している患者は抗精神病薬の副作用により口渇が問題となる。患者に発砲飴⁵⁸⁾を食してもらい、その味覚と発砲の刺激により唾液分泌を促そうとするものでは、発砲飴と唾液量の相関 ($r=0.02$) はなかったが、患者の 82.8%は飴で唾液が出やすくなったと答えていた。

また精神科の患者⁵⁹⁾や消化器手術後の患者⁶⁰⁾にガムを噛んでもらうことより唾液分泌を促すものがあった。

健康者を対象とした研究で、ブラッシングが唾液の分泌を高めるという研究もある⁶¹⁾がブラッシングとマッサージを比較した研究⁶²⁾では、マッサージの方が唾液分泌の量や分泌の継続時間において勝っていた。このほか経口摂取できない意識障害患者に耳下腺 (顎関節の関節部から顎に沿ってマッサージ) と顎下腺 (耳

の下から顎に沿ってマッサージ)、舌下腺 (顎を押し上げるようにマッサージ) をマッサージすることにより、唾液分泌を増加させ、口腔内 pH の改善を図っていた^{63) - 64)}。

手に指圧を施すことにより唾液の分泌を促す研究では、1 回に 30 秒の指圧を 1 日 6 回 14 日間行うことにより、唾液の分泌が対象群と比較し有意に多くなった⁶⁵⁾という。

また、食品を用いて唾液分泌を促進しようとしているものに、だし昆布の液を 3 時間ごとに噴霧し効果を挙げていた。だし昆布に含まれるグルタミン酸が唾液の分泌を促進し、ぬめりの成分であるヒアルロン酸が水分を保持して人工唾液の働きを促すという^{66) - 68)}。この他食品の洗口剤では、梅酢⁶⁹⁾や穀物酢⁷⁰⁾をブラッシングの後に含漱水として用いることによって唾液の分泌を図ろうとするものがあつた。いずれも唾液分泌に効果があつたとしている。

表 1. 口腔ケアの文献数

目的	方法	件数 (%)
口腔の清潔	洗口剤の使用	63 (65.0)
	ブラッシング	11 (11.3)
口腔の機能回復	唾液分泌の促進	13 (13.4)
	摂食・嚥下訓練	10 (10.3)
計		97 (100.0)

(2) 摂食・嚥下機能を高める口腔ケア

摂食・嚥下機能を高める口腔ケア^{71) - 80)}は、口腔機能の回復を主目的としたものであり、10 件 (10.3%) あつた。この研究のほとんどは脳血管障害の後遺症患者を対象としたものであつた。PT, OT, 栄養士、介護士の連携によってリハビリテーションの訓練として行われており、看護師は構音訓練やアイスマッサージを行っていた。ほとんどは摂食・嚥下訓練に重点が置かれていたが口腔内の清潔ケアの重要性にも言及していた。患者の舌苔を除去し、味覚を回復させて食事への欲求を高めるため、嚥下訓練前に口腔ケアを行うとあつたが、詳細な方法はいずれにも記述されていなかった。

3) 継続的な口腔ケアの研究

10 年間の文献の中で、口腔ケアの臨床研究が最も多かつたのは道重であつた。

他の著者は、1 件 (第 1 著者) のみであつた。多くの研究が洗口剤の効果をみたものであるが、道重は一貫してブラッシングによる口腔ケアを行って研究を進めていた。ブラッシングによる口腔ケアについて、歯垢を

確実に除去するための用具の重要性も述べている。電動ブラシや「給吸ブラシ910」(ライオン社)を用いてその有用性についても研究している⁴⁵⁾。また歯科医師や歯科衛生士と連携をとり、ブラッシング後の対象者の観察を共に行っていた。重症心身障害者に対しブラッシングによる口腔ケアを行うことで医療費を抑制できるという看護成果を出している⁴⁷⁾、着実にエビデンスを積み重ねていた。

以上、口腔ケアの方法を文献的に概説してみたが、その結果を表1に示す。

IV. 考察

看護師による口腔ケアの方法の研究を通して、口腔の清潔と口腔機能回復の概念がどのように目指されているかを分析した。そして口腔の清潔のためのケアには、洗口剤によるものとブラッシングによるものであった。口腔機能の回復のためのケアには唾液分泌を高めることによって口腔内の清潔を維持しようとするものと口腔機能を回復するためのリハビリテーションである摂食・嚥下訓練であった。洗口剤を用いた口腔ケアは主として食品の成分の化学作用により汚れを取り除くことであるが、研究対象者にとっては味覚への働きかけによって機能回復をもめざすものであった。

ブラッシングによる口腔ケアでは、歯や舌の汚れを取るだけでなく唾液分泌も促進されていた。これにより口腔の清潔を保持することと口腔機能を促進するという二つの概念は口腔ケアを確実に行うことによって別のものではなく、相乗効果を期待できるものであった。

洗口剤に食品を使っている研究がおこなわれているが、「食品だから飲み込んでよい」という記述があった。食品であっても口腔内を洗浄する洗口剤として用いた液は確実に外に排出し、細菌による感染予防をしなければならない。高齢者や意識障害者のような嚥下機能低下のある患者が主な研究対象であることから、誤嚥によって口腔の病原菌が気管支に入ることは絶対に避けなければならない。口腔ケアの洗浄液を確実に吸引することが口腔ケアを安全に行うことであり、このために口腔ケア用具として専用の給水・吸引ブラシを備えることの重要性について文献を通して痛感した。

口腔ケアの認識が高まってきたといわれるにもかかわらず、看護の口腔ケアの研究数は減少していることについては、論文の検討からは明らかにできなかった。

V. まとめ

1. 1997-2006年間に看護の分野において、口腔ケアの方法に関する文献は157(69.2%)件あり、方法について詳細に記述された文献は97件であった。
2. 口腔ケアの方法において、口腔の清潔を主とした

ケアと口腔機能の回復を促すケアにより分析した結果、前者では洗口剤により汚れをとるケア63件、ブラッシングによるケアが11件あり、後者では唾液分泌をたかめるケア13件、摂食・嚥下訓練が10件あった。

3. 文献の年次推移は1997年から徐々に増加して2003年にピークとなり、2005年に増加した後は年ごとに減少していた。
4. 口腔ケアの方法の研究において10年間継続して研究を行っている者は1名であり、他の研究者の文献は1件のみであった。

本研究は、平成19年度宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科・研究補助金を受けて行ったものである。

文献

- 1) 日本看護科学学会 第6期・7期看護学術用語検討委員会編集:看護行為用語分類,117,日本看護科学学会,2005.
- 2) 米山義武,吉田光由,佐々木英忠他:要介護高齢者に対する口腔衛生の誤嚥性肺炎予防効果に関する研究,日歯医学会誌,20,58-68,2001.
- 3) 日本歯科医師会監修:E BMIに基づいた口腔ケアのために,29,2002.
- 4) 山中克己:口腔ケア実践マニュアル(鈴木俊夫監修),日総研出版,13-14,1994.
- 5) 田島桂子:看護実践能力育成に向けた教育の基礎(第2版),医学書院,52,2006.
- 6) 長谷山雅美,川本まゆ子,畑山宣子他:ハイクロソフト酸化水による口腔洗浄の効果,日集中医誌7号,387-388,2000.
- 7) 藤島麻美,石川ふみよ,矢作直樹:東京保健科学学会誌,6(4),275-280,2004.
- 8) 平尾百合子,林滋子:梅酢による口腔ケアの有効性の検討,日本看護学会誌,8(1),27-34,1999.
- 9) 高橋和子,藤原直美:痴呆老人の口腔ケアを通しての学びハーブ(ペパーミント)茶を利用することで爽快感を表現できて,日本精神科看護学会誌,43(1),289-291,2000.
- 10) 榎本由美子,山本百合子,中出まゆみ:緑茶含漱液による口臭軽減の効果—イソジンガーグル液との比較—,日本看護学会論文集 成人看護II,32号,133-134,2001.
- 11) 佐藤文恵,杉本かつ枝,廣石直美他:口腔ケアに使用する薬剤の比較研究 緑茶と30倍イソジンガーグル液を使用時の比較,整形外科看護,2(2),201-204,1997.
- 12) 浜本凡子,住栄恵子,中村久美子他:老年期におけるお茶による口腔ケアがもたらす効果—水・含漱液・緑茶の

- 比較一, 日本看護学会論文集: 老年看護, 33号, 168-170, 2002.
- 13) 宇津木幸江, 関端通子, 鈴木愛子他: 緑茶スプレーによる口腔ケアの効果 MRSA の陰性化をめざして, 印刷局医報, 46~49, 193-196, 2003.
- 14) 白石智美: MRSA 咽頭保菌者に対する緑茶マウススプレーの効果 86歳女性に試みた一事例, 奈良県立三室病院看護学雑誌 (19), 49-52, 2003.
- 15) 藤井絹子, 小俣裕紀恵, 濱本むつみ他: 消化器疾患患者の口腔内トラブルにおけるセサミオイルと緑茶の効果, 日本看護学会論文集: 成人看護II, 33号, 150-152, 2003.
- 16) 榎本由美子, 山本百合子, 中出まゆみ: 緑茶含漱液による口臭軽減の効果—イソジンガーグル液との比較一, 第32回日本看護学会論文集 成人看護II, 133-134, 2001.
- 17) 糟谷由美子, 良木弥生, 椿栄子他: ハッカ緑茶重曹含嗽液を使用した口腔ケアの効果 口腔内環境の指標からの評価, 西尾市民病院紀要, 16 (1), 155-159, 2005.
- 18) 山本真子, 亀井恵, 紫藤文子他: 療養型病棟における誤嚥性肺炎予防に対するカテキン含有スプレーの有用性についての検討, 日本未病システム学会雑誌, 12 (1), 71-73, 2006.
- 19) 羽金しげ子, 岩田光司, 高橋 真他: 口腔ケアの一考察 緑茶使用の口臭予防効果について, 竹田総合病院医学雑誌 (29), 55-58, 2003.
- 20) 徳永綾子, 高みな子, 中村雅子他: 水がもたらす含嗽の効果 緑茶・イソジンとの比較, 検討を行って, 日本看護学会誌, 15 (1), 83-90, 2005.
- 21) 奥谷恵美, 池田純子, 加藤視保子他: レモン酢による唾液分泌を促すための口腔ケア イソジンガーグルと比較して, 西尾市民病院紀要 16 (1), 160-161, 2005.
- 22) 斉木尚代, 渡辺悦子, 青戸千恵美他: 意識障害患者の口腔ケア 口腔清拭における有効な溶液と回数 の検討, Brain Nursing, 14 (3), 263-267, 1998.
- 23) 土屋千春, 庄司ミサヲ, 大坂和文他: 口腔ケアからはじめよう, 日本精神科看護学会誌, 43 (1), 286-288, 2000.
- 24) 荒木麻美, 小杉千恵子, 鈴木ひろみ他: 口腔ケアにおけるグリセリンレモンの効果, 磐田市立総合病院誌, 4 (1), 33-37, 2002.
- 25) 柴田摩文, 小泉仁美, 鈴木麻美: レモン水を用いた口腔ケアの有効性の追及, しょうけん: 浜松労災病院学術年報 2002, 144-145, 2003.
- 26) 平尾百合子, 林滋子: 梅酢による口腔ケアの有効性の検討, 日本看護学会誌, 8 (1), 27-34, 1999.
- 27) 後呂真由美, 清水映理香, 杉田直子他: 穀物酢を用いた口腔ケアの効果, 日本看護学会論文集: 看護総合, 34号, 9-11, 2003.
- 28) 宮本朋代, 長田京子: ターミナル期の患者にパイナップルを使用した口腔ケアの効果, 日本看護学会論文集: 看護総合 33号, 118-120, 2002.
- 29) 吉田奈津美, 大野香織, 中司明希他: 意識障害患者の口腔ケアにおけるパイナップルブラシの効果, 日本看護学会論文集: 成人看護II, 35号, 15-17, 2005.
- 30) 河原由香, 坂上敬子, 小林貞江: 蛋白分解酵素を含むキウイフルーツ液とイソジン液を比較した口腔ケアの効果 乾燥痰のこびりつきの除去を試みて, 日本看護学会論文集: 看護総合, 37号, 161-163, 2006.
- 31) 川戸幸志, 牧野尚子, 澤木知子: アロエヨーグルトドリンク・アロエ水の口腔内保湿効果の検証, 日本看護学会論文集: 看護総合, 36号, 127-129, 2005.
- 32) 糟谷由美子, 良木弥生, 椿栄子他: ハッカ緑茶重曹含嗽液を使用した口腔ケアの効果 口腔内環境の指標からの評価, 西尾市民病院紀要, 16 (1), 155-159, 2005.
- 33) 井上 忍, 山崎弘美, 小池牧子他: 高齢患者の口腔ケア方法の改善, 看護実践の科学 26 (3), 67-72, 2001.
- 34) 藤井絹子, 小俣裕紀恵, 濱本むつみ他: 消化器疾患患者の口腔内トラブルにおけるセサミオイルと緑茶の効果, 日本看護学会論文集: 成人看護II, 33号, 150-152, 2003.
- 35) 山久明子: 術後患者の舌苔に対する口腔ケアの一事例 セサミオイルによる保湿効果について, 奈良県立三室病院看護学雑誌, 20 (2), 41-43, 2004.
- 36) 高橋和子, 藤原直美: 痴呆老人の口腔ケアを通しての学び ハーブ(ペパーミント)茶を利用することで爽快感を表現できて, 日本精神科看護学会誌, 43 (1), 289-291, 2000.
- 37) 野田和子, 披田野貴美, 長谷川礼子他: 消化器疾患患者の口腔内の乾燥・舌苔・口臭の改善の試み 10%ハチミツレモン水による含嗽, 看護学雑誌, 62 (3), 284-287, 1998.
- 38) 藤島麻美, 石川ふみよ, 矢作直樹: 口腔ケアにおける中性電解水の安全性. 消毒効果, 適応性の検討—イソジンガーグル液との比較—東京保健科学学会誌, 6 (4), 275-280, 2004.
- 39) 諏訪智子, 西村フジ, 高尾ゆき子鋪他: 酸性水を用いた口腔ケアの試み MRSA 対策として, 東京都老人医療センター看護研究集録・教育活動報告, 23号, 31-35, 1998.
- 40) 青木佳代, 佐藤明珠, 松本鈴香: 酸性水による効果的な鼻口腔ケアの実践 MRSA 陰性化を目指して, 日本看護学会論文集: 老年看護, 36号, 85-87, 2006.
- 41) 長谷山雅美, 川本まゆ子, 畑山宣子他: ハイクロソフト酸化水による口腔洗浄の効果, 日集中医誌 7号, 387-388, 2000.
- 42) 星 美代子, 中村幸子, 稲垣雪枝他: アズノール軟膏を併用した口腔ケア, 函館中央病院医誌 4号, 65-72, 1999.
- 43) 土屋千春, 庄司ミサヲ, 大坂和文他: 口腔ケアからはじめよう, 日本精神科看護学会誌, 43 (1), 286-288, 2000.
- 44) 仲亀聖子, 羽生和子, 菊地弘美他: 全身麻酔を受ける患者の口腔ケアに関する一考察, 日本看護学会論文集: 看護総合, 34号, 3-5, 2003.

- 45) 道重文子, 吉永純子, 原田江梨子: 嚥下障害患者に対する給吸ブラシによる口腔ケアの効果, 徳島大学医療技術短期大学部紀要 8, 33 - 38, 1998.
- 46) 道重文子, 吉永純子, 原田江梨子他: 口腔ケアの質改善による看護成果と課題, 徳島大学医療技術短期大学部紀要, 11, 25-30, 2001.
- 47) 道重文子, 吉永純子, 齊藤廣子他: 長期経管栄養患者に対する就寝前口腔清拭の必要性に関する細菌学的検討, 日本看護学会論文集:看護総合, 33号, 230 - 232, 2002.
- 48) 野村哲司, 坂本るり子, 松浦由紀子他: 経口気管内挿管患者の口腔ケア手技の検討—清潔度に着目しての評価—, 広島県立病院医誌 31 (1), 121-125, 1999.
- 49) 薄葉知美, 石井敦子: 摂食障害患者のための口腔ケア, 一吸引チューブ付き歯ブラシによる洗浄法—, 日本看護学会論文集:成人看護II, 127-129, 2001.
- 50) 横山みゆき, 伊藤久美子, 長谷川喜美子他: 脳血管障害患者に対する口腔ケアの一考察, 日本リハビリテーション看護学会学術大会集録 13 回, 133-135, 2001.
- 51) 井上 忍, 山崎弘美, 小池牧子他: 高齢患者の口腔ケア方法の改善, 看護実践の科学 26 (3), 67-72, 2001.
- 52) 藤坂めぐみ: 効果的な口腔ケア, 磐田市立総合病院誌, 4 (1), 48-51, 2002.
- 53) 小泉敦子, 槌田真代, 飯高敦子他: 意識障害のある患者の口腔ケア ブラッシング法の効果の検討, 東邦大学看護研究会誌, 1 (1), 18-23, 2003.
- 54) 田中愛子, 土井よし子, 石島千佳子: 歯垢除去に舌苔除去を取り入れた口腔ケアの効果 意識障害のある要介護者の口腔内清潔の向上を目指す, 日本看護学会論文集:成人看護II, 36号, 401-403, 2005.
- 55) 迫田綾子, 長谷川浩子, 徳川麻衣子他: 口腔ケアの効果評価に関する細菌学的検討, 日本看護学会論文集:看護総合, 36号, 402-404, 2005.
- 56) 日本歯科医師会監修: EBMに基づいた口腔ケアのために, 29, 2002.
- 57) 日本歯科医師会監修: EBMに基づいた口腔ケアのために, 40, 2002.
- 58) 松尾令子, 江波戸和子, 秋内里美他: 統合失調症患者におけるドライマウスと口渇に関する研究, 日本精神科看護学会誌, 48 (1), 12-17, 2005.
- 59) 多田八千代, 山下由宇子, 野倉弘子他: 口臭, 体臭によって阻害されている人間関係を改善するための援助 ガムでの口腔ケアを通して学んだこと, 日本精神科看護学会誌, 47 (1), 248-251, 2004.
- 60) 中井佐奈, 村田悦子, 竹村定美他: 全身麻酔による消化器手術後患者の口腔ケア ガム使用による唾液分泌促進の効果, 日本看護学会論文集:成人看護 I, 32号, 26-28, 2002.
- 61) 市山かづみ, 山本令子, 上籠美香他: 口腔ケア用具の種類による唾液分泌量と口腔ガス量の変化, 奈良県立三室病院看護学雑誌, 21 巻, 25-28, 2005.
- 62) 草柳伊久美, 三上れつ: 口腔ケアの唾液腺マッサージに関する研究, 日本看護学会論文集:看護総合, 36号, 399-401, 2005.
- 63) 小島麻衣子, 星野里衣子, 高井尚子他: 口腔内自浄作用を高めるために唾液腺マッサージによる口腔内環境の改善を試みる, 日本看護学会論文集:老年看護, 34号, 159-161, 2004.
- 64) 小山田幸子, 小原志津子, 高橋朋恵他: 口腔乾燥に唾液腺マッサージを導入した効果, 日本看護学会論文集:看護総合, 37号, 80-82, 2006.
- 65) 横山政代, 大橋和代, 田仲かずみ他: 指圧を用いた口腔乾燥の軽減と舌苔の減少への援助, 日本看護学会論文集:成人看護 II, 36号, 407-409, 2005.
- 66) 有木園子, 中尾政子, 橋本美幸他: 意識障害患者の唾液分泌促進を試みて だし昆布水の有効性, 日本看護学会論文集 成人看護II 35号, 36-38, 2005.
- 67) 高橋佳苗, 土井志保, 畑下仁美他: 唾液分泌促進を目的としただし昆布水の有効性の検証, 日本看護学会論文集:看護総合, 37号, 158-160, 2006.
- 68) 橋本美幸, 山元文栄, 針山欣子他: ブレインナーシング, 22 (5) 533-536, 2006.
- 69) 榊靖枝, 清野留理子, 日時文他: 意識障害患者への梅酢含嗽水による唾液分泌の促進効果, 日本看護学会論文集:看護総合, 34号, 12-13, 2003.
- 70) 瀬川幸: 唾液分泌に焦点をあてた穀物酢含嗽水の効果, 日本看護学会論文集:看護総合, 36号, 394-395, 2005.
- 71) 真城登志子: 嚥下障害患者との関わりを通して, 日本リハビリテーション看護学会学術大会集録 13 回 177-179, 2001.
- 72) 上田里美, 鈴木香, 白木一輝他: 経管栄養患者の摂食・嚥下へのアプローチ, 日本リハビリテーション看護学会学術大会集録 13 回 24-26, 2001.
- 73) 原とし江, 葉袋真奈美, 浦野久美他: 嚥下障害回復に向けた口腔ケアのとりくみ 経管栄養患者への実施評価から, 日本リハビリテーション看護学会学術大会集録 14 回 129-131, 2002.
- 74) 小林佐織, 佐藤松子, 半田衣江他: 摂食・嚥下障害をもつ患者に対しての安全な経口摂取を目指して, 日本看護学会論文集:老年看護 33号 165-167, 2003.
- 75) 加藤貴子, 菊池徹, 江口文他: チューブ栄養から経口摂取確立へのアプローチ, 神奈川県総合リハビリテーションセンター紀要 28号, 47-51, 2002.
- 76) 井川彰子, 脇田知奈, 中村友香: リハビリテーション科病棟看護師の嚥下訓練に対する看護実践について, 浜松労災病院学術年報 2003号, 134-136, 2004.
- 77) 常清節子, 森岡幹子, 原 明子他: 嚥下障害をもつ患者

の看護 胃瘻注入と併用しつつ経口摂取を試みて, 日本精神科看護学会誌 48 (2), 109-113, 2005.

- 78) 谷田部八枝子, 松浦美和: 地域医療第 44 回特集, 649-650, 2005.
- 79) 内山美和: 嚥下障害をもつ患者の食への欲求に対するアプローチ「食べたい」気持ちを支える看護とは, クリニカルスタディ 26 (2), 144-147, 2005.
- 80) 小林貴美代, 横川初枝, 豊なおみ: 経管栄養患者への間接的嚥下訓練の効果 介護療養型医療施設における看護職の取り組み, 山口県看護研究会学会学術集会プログラム集録 3 回 80-82, 2004.

